

山梨県甲府市方言



山梨県方言区画図

【山梨県の方言区画】山梨東部方言と山梨西部方言に二大別される。山梨西部方言域内の、南巨摩郡早川町奈良田(みなみこまぐんはやかわちょうならだ)集落のことは音声そしてアクセントの特異性から言語島と位置づけられるため、方言区画は「山梨東部方言」「山梨西部方言」「奈良田方言」の三つに分けられる。東条操の方言区画においては、山梨東部方言は関東方言のうちの西関東方言に、山梨西部方言は東海東山方言の長野・山梨・静岡方言に属する。山梨県内を東西に分かつ方言境界は、大菩薩連嶺から御坂山地にかけての山脈である。山脈の下を通る御坂トンネルの東側、山がちな地域である郡内(ぐんない)地方が山梨東部方言域、西側の甲府盆地と周辺にあたる国中(くになか)地方が山梨西部方言域にあたる。否定辞には山梨東部方言では「ナイ」、山梨西部方言では「ン」、奈良田方言では「ノー」を用いる。意志表現や推量表現においては山梨東部方言では「ベー」、山梨西部方言では「ズ」「ザー」「ズラ」、奈良田方言ではズラの音変異形「ドゥラ」を用いる。否定、意志、推量表現などで、山梨東部方言に関東方言らしさ、山梨西部方言に東海東山方言らしさが表れている。以上は東西に分けての特色だが、

県内を南北に分けてみると、音声面での違いが指摘できる。南側ほど「行かない」がイカニャー、名字の「古屋」がフリャーになるなど拗長音の出現が多くなり、これらは「ニャーニャーことば」と称せられている。

山梨西部方言はさらに五つに小区画される。

北巨摩地方の方言(ここでは地域名称を冠し「峡北(きょうほく)方言」と称す。)

富士川流域の河内(かわうち)方言(同様に「峡南(きょうなん)方言」と称す。)

甲府盆地東側地域の東郡(ひがしごおり)方言(同様に「峡東(きょうとう)方言」と称す。)

甲府盆地西側地域の西郡(にしごおり)方言(同様に「峡西(きょうさい)方言」と称す。)

甲府市を中心とする中郡(なかごおり)の方言(同様に「峡中(きょうちゅう)方言」と称す。)

峡北方言では過去のトーが用いられず、峡南方言ではトー使用が多いという違いがある。峡東、峡西、峡中方言は共通事項も多く、「甲府盆地の方言」とくられることもある。

山梨東部方言はさらに二つに小区画される。

郡内北部の方言(ここでは地域名称を冠し「東部方言」と称す。)

郡内南部の方言(同様に「富士方言」と称す。)
東部方言は東接する東京都多摩地域の方言との連続性、富士方言は南接する静岡方言との連続性が見受けられる。

以上のように、小区画では地域区分に即し七つに分かれるが、古代より甲斐国として行政的にまとまりのある地域であることから、山梨方言として共通する事項も多い。

【甲府市方言について】甲斐国時代より「甲斐府中」として、近代以降も県庁所在地として、山梨県の中心地と位置づけられる。江戸時代、甲府城主柳沢吉里の家臣で甲府に二年ほど在住した江戸生まれの柳沢淇園による随筆集『ひとりね』(享保11年・1726年頃)には、方言についての記述がある。挙げた方言の説明で「又甲州ニテモ所ニヨリテチガイアリ。」

とあるが、その内容は現在の山梨県の方言区画とも合致するもので、近世中期以降も大きくは変化していないことが見て取れる。同書では甲府のことばについては「城下の町は言葉もあまり江戸に替はらぬ所あれどもひゞきにあぢなる所多し。」と記している。山梨県内では「山梨でことばがよいのは甲府と(郡内の城下町だった)谷村(やむら)」とよく言われるが、かつてから甲府は山梨(甲斐)の中心地の規範的なことばと意識され、位置づけられてきたといえよう。

甲府市は南北に細長い形をしており、市内も、北は長野県境に接した山間地、中部は市街中心地で昔の城下町、南部は甲府盆地中央部の農地も多いところ、というようにさらに三区分できる。『甲府市史』の「方言」項では、北部を「市の中で、より古いことばの姿を残すと思われるところ」、中部を「市域中最も洗練されたことばを使うところ」、南部を「市の中心部では消えかかっている語が現存しているところ」のように記述している。

世代差が指摘できる事項は以下のようなものである。動詞「来る」は意志形でコズとキズ、コザーとキザーがあるが、キ音になる上一段化語形は高年層に見られる。ズによる表現自体がすでに一部の高年層が使うものになっている。ザーによる表現は中年層までは多用するが若年層ほど使用が少ない傾向がある。このザーはザダ行音交替のためコダー、カカダー(書こう)のようにダーとなることが見受けられる。動詞「する」がシルとなる上一段化は高年層に見られる。過去のトー、丁寧のヤスも高年層に使用が多い。可能表現ではいわゆる「レ足す」があるがこれも語によっては高年層ほど積極的に使用し、デキレルなどは高年層に使用が見られる。推量表現も過去推量のツラは高年層が使用するが、ズラヤラによる表現は若年層にも使用が多い。仮定のカクジャ(ー)などジャ(ー)による表現、カイチョ(書くな)のようなチョによる禁止表現などは、全世代でよく使用されている。

【表記について】甲府市方言にはガ行鼻濁音があるが、通常の濁音表記を行う。

【調査概要】本稿の記述は、甲府市内で生育し、調査時も居住する高年層話者(明治35～昭和戦前生まれ)への聴き取り調査、および、甲府市で生育した筆者

(1968年生まれ)の内省に基づく。用例には、甲府市の自然談話文字化資料、および、甲府市の昔語り資料から引用したものも含む(用例出典参照)。用例の表記は、適宜漢字仮名交じり文や音声表記に改めた。共通語訳は筆者による。引用元を記していない用例は、聴き取り調査・筆者の内省によって得たものである。

山梨県甲府市方言の活用表

《動詞》

活用形		類別			
		a類 書く	b類 見る	来る	する
終止類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル シル
	断定過去	カイタ カイトー	ミタ ミトー	キタ キトー	シタ シトー
	命令	カケ	ミロ	コイ コー	シロ
	禁止	カイチョ	ミチョ	キチョ	シチョ
	意志	カコー カカズ カカザー	ミヨー ミズ ミザー ミラザー	コヨー コズ キズ コザー キザー キラザー	シヨー セズ シズ セザー シザー セラザー シラザー
	勧誘	カイチャー	ミチャー	キチャー	シチャー
	推量	カクラ	ミルラ	クルラ	スルラ シルラ
	過去推量	カイツラ カイタラ	ミツラ ミタラ	キツラ キタラ	シツラ シタラ
	否定意志・否定推量	カクメー	ミルメー	クルメー	シメー
	接続類	連体非過去	カク	ミル	クル
連体過去		カイタ カイトー	ミタ ミトー	キタ キトー	シタ シトー
中止		カITE	ミTE	キTE	シTE
仮定		カキヤ(ー) カケバ カイタラ	ミリヤ(ー) ミレバ ミロバ ミタラ	クリヤ(ー) クレバ コーバ キタラ	スリヤ(ー) スレバ シリヤ(ー) シレバ シロバ シタラ
否定仮定		カイチョバ	ミチョバ	キチョバ	シチョバ
派生類	否定	カカン カカネー カカナー	ミン ミネー ミナー	コン コネー コナー	シン シネー シナー
	丁寧	カキマス カキヤス カキース	ミマス ミヤス ミース	キマス キヤス キース	シマス シヤス シース
	使役	カカセル カカス	ミサセル ミサス	コサセル コサス	サセル サス
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能	カケル カケレル	ミレル ミレレル	コレル コレレル	《デキル》 《デル》
	尊敬	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	継続	カITEール	ミTEール	キTEール	シTEール
	希望	カキテー	ミテー	キテー	シテー
	のだ	カクダ	ミルダ	クルダ	スルダ シルダ
	のだ推量	カクズラ	ミルズラ	クルズラ	スルズラ シルズラ

a 類動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ/トー	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イッ-タ/トー」。
g	嗅ぐ kag・u	カイ-ダ/ドー	gをiにする。-タが-ダ、-トーが-ドーになる。
s	出す das・u	ダシ-タ/トー	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac・u	タッ-タ/トー	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ/ドー	nをN(撥音)にする。-タが-ダ、-トーが-ドーになる。
g	死ぬ sig・u	シン-ダ/ドー	gをN(撥音)にする。-タが-ダ、-トーが-ドーになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ/ドー	bをN(撥音)にする。-タが-ダ、-トーが-ドーになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ/ドー	mをN(撥音)にする。-タが-ダ、-トーが-ドーになる。
r	切る kir・u	キッ-タ/トー	rをQ(促音)にする。
w/	買う ka(w)・u	カッ-タ/トー	wをQ(促音)にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生[ガクセー](だ)
終 止 類	断定非過去	アカイ	シズカダ	学生ダ
		アケー	シズカドー	学生ドー
	断定過去	アカカッタ	シズカダッタ	学生ダッタ
		アカカattoo	シズカダattoo	学生ダattoo
推量	アカイラ	シズカズラ	学生ズラ	
過去推量	アカカッツラ	シズカダッツラ	学生ダッツラ	
		アカカッタラ	シズカダッタラ	学生ダッタラ
接 続 類	連体非過去	アカイ	シズカナ	学生デアル
		アケー	《シズカノ》	《学生ノ》
	連体過去	アカカッタ	シズカダッタ	学生ダッタ
		アカカattoo	シズカダattoo	学生ダattoo
中止	アカクテ	シズカデ	学生デ	
仮定	アカカッタラ アカケレバ アカケリヤ(ー) アカケロバ	シズカナラ シズカダッタラ	学生ナラ 学生ダッタラ	
派 生 類	否定	アカクナイ	シズカジャ(ー)ナイ	学生ジャ(ー)ナイ
		アカクネー	シズカジャ(ー)ネー	学生ジャ(ー)ネー
			シズカデワナイ	学生デワナイ
	なる	アカクナル	シズカニナル シズカンナル	学生ニナル 学生ンナル
	丁寧	アカイデス	シズカデス	学生デス
のだ	アカイダ	シズカナナダ	学生ナナダ	
のだ推量	アカイズラ	シズカズラ	学生ズラ	

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

a 類動詞(五段動詞)は 型、b 類動詞(一段動詞)は 型と 型 r、「来る」は 型 k と 型 r、「する」は 型 s と 型 r の活用形をもつ。

a 類動詞「書く」の l 型の形式のうち、共通語と異なるのは、推量形(カクラ) 否定形(カカン、カカネー、カカナー) のだ形(カクダ)であるが、いずれも l 型であることは同様である。

b 類動詞「見る」の 型 r の形式のうち、共通語と異なるのは、推量形(ミルラ) 仮定形(ミリヤ(ー)、ミロバ、ミルジャ(ー)) 否定形(ミン、ミネー、ミナー) のだ形(ミルダ)である。

「来る」は、l 型 r の語幹に「kir」が表れる(意志形の「キラザー」)が出現は少ない。命令形および仮定形に 型 k の形式である「コー」「コーバ」が現れる。共通語と異なるのは、推量形(クルラ) 仮定形(クリヤ(ー) コーバ、クルジャ(ー)) 否定形(コン、コネー、コナー) のだ形(クルダ)である。

「する」は、 型 s の基幹にエ段のセが表れる(意志形のセズ、セザー)。また l 型 r の語幹に「ser」が表れる(意志形のセラザー)。共通語と異なるのは、断定非過去形・連体非過去形(シル) 推量形(スルラ、シルラ) 仮定形(スリヤ(ー) シリヤ(ー) シレバ、シロバ、スルジャ(ー) シルジャ(ー)) 否定形(シン、シネー、シナー) のだ形(スルダ、シルダ)である。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形、連体非過去形は同形で、「書く」「見る」「来る」「する」は「カク」「ミル」「クル」「スル・シル」という形になる。シルは高年層が使用する。

この方言の断定非過去形にジャン(ケ)がつくと、共通語では意志形、勧誘形が用いられる以下のような用法がある。

- ・私がやるじゃん。(私がやろう。[意志形])
- ・一緒に飲むじゃん。(一緒に飲もう。[勧誘形])

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形、連体過去形は同形で、a 類動詞の基幹音便形、b 類動詞の 型基幹(=語幹)「来る」「する」はそれぞれ l 型 k・s イ段形「キ」「シ」に「タ」

を後接した形と、「トー」を後接した形がある。「トー」による形式は世代では高年層ほど多く使用する。また山梨県内でも峡北地方は使用しないという地域差が見られる。

- ・へー行っとー。(もう行った。)
- ・それでさ、びっくりしちやっとーさ。(それでね、びっくりしてしまったのだよ。)(市史)

〈命令形〉

「来る」の命令形は「コイ」と「コー」が併用される。「コー」は「コイ」の音変化形で多用される。命令形には方言終助詞の「シ」が後接することが多い。

- ・はくこーし。(早く来いよ。)

〈禁止形〉

「チョ」による禁止表現が全世代で多用される。「チョ」は a 類動詞の基幹音便形、b 類動詞の 型基幹、「来る」「する」はそれぞれ l 型 k・s イ段形「キ」「シ」に後接する。「チョ」は古典語の禁止表現「な-そ」に由来するとされる。「チョ」には方言終助詞「シ」や「ヤ」や「ヤレ」などが後接する。

- ・「もー行っちよし」。(もう行くなよ。)(市史)
- ・「そんなこたア、もうやっちよ」。(そんなことはもうするな。)(市史)
- ・「偉そうなここいちよ」。(偉そうなことを言うな。)(市史)
- ・「ほんねに早く歩いちよし」。(そんなに早く歩くなよ。)(市史)

〈意志形〉

「カコー」「ミヨー」「コヨー」「シヨー」は共通語的な使用である。このほか各類に「ズ」や「ザー(音変異形はダー)」による表現がある。a 類動詞「書く」では基幹ア段形に後接して「カカズ」「カカザー」、b 類動詞「見る」では 型基幹に後接して「ミズ」「ミザー」となる形と、l 型 r 化した「ミラザー」という形がある。「来る」では l 型 k の基幹イ段音に後接する「キズ」「キザー」と、l 型 k の基幹オ段音に後接する「コズ」「コザー」がある。l 型 r 化した「キラザー」は出現が少ない。「する」では l 型 s の基幹イ段音に後接する「シズ」「シザー」と、l 型 s の基幹エ段音に後接する「セズ」「セザー」と、l 型 r 化した「セラザー」「シラザー」がある。

- ・「妹に部屋の障子を開けさせざー」。(妹に部屋

の障子を明けさせよう。)(市史)

「ズ」による用法は、「カ」を後接して「ズカ」という疑問表現で使用し、「ズ」が促音化することも多い。

- ・「どう書かっか。」(どう書こうか。[「書かずか」より])(市史)
- ・「いつ行かっか。」(いつ行こうか。[「行かずか」より])(市史)
- ・「太郎を役場に行かせっか。」(太郎を役場に行かせようか。[「行かせずか」より])(市史)
- ・「いつきっか/こっか。」(いつ来ようか。[「来ずか」より])(市史)
- ・「いつきずか/こずか。」(いつ来ようか。)(市史)
- ・「どうしずか。」(どうしようか。)(市史)

「ズ」と「ザー」は双方、意志表現と勧誘表現に使用されるが、「ズ」がより意志表現にそぐい、「ザー」が勧誘表現にそぐうという傾向が見られる。また世代差の観点からは、「ズ」は高年層使用に傾き、「ザー」の方がより多くの世代で使用するという傾向が見られる。「ズ」による用法でもこれが「書かっか」のように促音化したものは若年層もよく使用している。

断定非過去形にジャン(ケ)がつくと、意志形を表す以下のような用法がある。

- ・私がやるじゃん。(私がやろう。)

〈勧誘形〉

意志形と同じ形を取るものに、共通語と同形の「カコー」類の他、「ズ」や「ザー(音変異形はダー)」による表現がある。

勧誘形独自の形として、中若年層に使用される「チャー」がある。a類動詞では基幹音便形、b類動詞では型基幹、「来る」「する」はそれぞれI型k・sイ段形「キ」「シ」に「チャー」を後接させる。

「カイチャー」は「書いては」から生じた形式で、高年層はこれを「書いてはくれないか・書いてくれ」という依頼表現に用いるが、下の世代では勧誘表現に用いる。

- ・宿題の作文、一緒に書いちゃー。(宿題の作文、一緒に書こうよ。)

断定非過去形にジャン(ケ)がつくと、勧誘形を表す以下のような用法がある。

- ・一緒に飲むじゃん。(一緒に飲もう。)

〈推量形〉

中部地方の方言は推量を表す形式として古典語の「らむ」由来とされる「ラ」や、「むずらむ」由来とされる「ズラ」や、「つらむ」由来とされる「ツラ」を用いるが、甲府市方言も同様である。関東方言に分類される山梨東部方言では推量形式に「ペー」も用いるほか、これらのズラ類の推量形式も併用する地域がほとんどで、「ペー」のみを使用するのは山梨県内東端の北都留郡や南都留郡の一部である。

中部地方の中でも、山梨方言においては、推量形を「ラ」で、のだ推量形を「ズラ」で表現するという、推量形とのだ推量形の使い分けが明瞭であることが特徴的である。

a類動詞では基幹ウ段形に、b類動詞・「来る」「する」ではI型「基幹ウ段形に、「ラ」が後接する。

- ・「本を読むら。」(本を読むだろう。)(市史)
- 後述の過去推量形、のだ推量形の項も参照のこと。
〈過去推量形〉

高年層は「つらむ」由来とされる「ツラ」を用いるが、下の世代は「ツラ」に替わって過去推量形を「タ」+「ラ」で、のだ推量過去形を「タ」+「ズラ」で表すという世代差がある。なお、「ツラ」は「～ただろう」という過去推量と、「～たのだろう」というのだ推量過去形の双方を表しうるので、どちらの意味かは文脈で判断することになる。下の世代で「タラ」や「タズラ」を使用するようになったのは、過去推量とのだ推量過去形との弁別化を志向したことが一因と考えられる。

「ツラ」は、a類動詞の基幹音便形、b類動詞の型基幹、「来る」「する」はそれぞれ型k・sイ段形「キ」「シ」に後接する。

- ・「本を読むづら。」(本を読んだらろう/読んだのだろう。[高年層])
- ・「本を読んだら。」(本を読んだらろう。[中若年層])
- ・「昨日帰っつら。」(昨日帰ったらろう/帰ったのだろう。[高年層])(市史)
- ・「昨日帰ったら。」(昨日帰ったらろう。[中若年層])

前述の推量形、後述ののだ推量形の項も参照のこと。
〈否定意志形・否定推量形〉

否定意志形と否定推量形は同形となる。「まい」の音変異形の「メー」が、a類動詞では基幹ウ段形(断定非過去形)、b類動詞と「来る」ではl型rの基幹ウ段形、「する」ではl型sの基幹イ段形に後接する。高年層男性に使用が見られる。

- ・「あんな処へは行くめー。」(あんな所には行かない。[高年層男性])(市史)
- ・「君が提案すりゃー誰も反対しめー。」(君が提案すれば誰も反対しないだろう。[高年層男性])(市史)
- ・「自分の子じゃーあんなに叱るめーに。」(自分の子だったらあんなに叱らないだろうに。[高年層男性])(市史)

前述のように「メー」による表現は高年層男性に見られ、女性や下の世代は否定意志形には否定形を用い、否定推量形には否定形に推量の「ラ」を後接させる。

- ・あんな所には行かん。(あんな所には行かない。[高年層女性・中若年層])
- ・おまんが提案すりゃー誰も反対しんら。(お前が提案すれば誰も反対しないだろう。[高年層女性・中若年層])
- ・自分の子じゃーあんなに叱らんらに。(自分の子だったらあんなに叱らないだろうに。[高年層女性・中若年層])

〈中止形〉

「テ」によって表される。a類動詞では基幹音便形、b類動詞では型基幹、「来る」「する」ではイ段形「キ」「シ」に後接する。

〈仮定形〉

「カケバ」の類と「カイトラ」の類を用いる。他にa類動詞の基幹エ段形、b類動詞と「来る」「する」のl型r基幹エ段形に「バ」がついて融合した「カキヤ(ー)」「ミリヤ(ー)」「クリヤ(ー)」「スリヤ(ー)」が用いられる。

- ・「その南の村のうしろの高い山にでっけえ穴をあけりゃあ湖の水を海に流してしまうことができると思ったんだとよ。」(その南の村の後ろに大きい穴を開ければ湖の水を海に流してしまうことができると思ったのだとよ。)(山梨・「甲斐の湖」)

この他、b類動詞と「する」のl型r才段形、「来

る」のl型才段長音(命令形と同形の「コー」)に「バ」が後接する「ミロバ」「シロバ」「コーバ」がある。これは「命令形+バ」の形を取るもので、a類動詞では「命令形+バ」の形式が標準の仮定形になるが、「命令形+バ」の形式が標準の仮定形にならないb類動詞と「来る」「する」もこの形が仮定形となりうるものである。これらは「ロバ形」などと呼ばれて、当該方言では音訛形と意識されつつもよく聞く語形である。

- ・「早くこーばいいもの。」(早く来ればいいものを。)(市史)
- ・明日晴れるばなあ。(明日晴ればなあ。)
- ・早く寝るば早く起きれる。(早く寝れば早く起きれる。)
- ・「もっと早く起こさせるばよかったに。」(もっと早く起こさせればよかったのに。)(市史)

活用表には含めなかったが、「ジャ(ー)」による仮定表現は山梨方言に特徴的なものであり、方言形と気づかれずに多用されている。「のでは」が音変化した語形と考えられ、意味としては「～のならば」にあたる。a類動詞の基幹ウ段形、b類動詞と「来る」「する」のl型rウ段形に後接し、「カクジャ(ー)」「ミルジャ(ー)」「クルジャ(ー)」「スルジャ(ー)」「シルジャ(ー)」のようになる。

- ・書くじゃきれいに書いてくりよー。(書くならきれいに書いてくれよ。)
- ・お客がくるじゃー急いで片付けんと。(お客が来るなら急いで片付けないと。)

〈否定仮定形〉

「チョバ」を用いる表現がある。禁止形に使う「チョ」に「バ」を後接させる。勧めや願望や望ましい事態、反実仮想を表現する文脈にそぐ。

- ・あんな手紙書いちよばよかった。(あんな手紙書かなければよかった。)
- ・頭痛がするじゃ映画なん見ちよば。(頭痛がするなら映画なんか見なければ。)
- ・めしよー食ちよばやせるさよー。(めしを食わなければやせるに決まってるよ。)

否定仮定形で「なければ」のように義務を表現する場合は「ネバ」や「ネー」を用いる。

- ・「本棚を整理せねばならん。」(本棚を整理しなければならん。)(市史)

- ・本棚を整理しねーならん。(本棚を整理しなければならん。)
- ・私が行かねーならんだよ。(私が行かなければならんのだよ。)

〈否定形〉

「カカン」「ミン」「コン」「シン」のように否定辞「ン」による形である。否定辞の東西対立を示す東の「ナイ」と西の「ン」の境界線は山梨西部方言と山梨東部方言の境界線に一致し、山梨西部方言は否定辞「ン」の東端地域である。「いる(居る)」の否定形は「イン」となる。否定辞「ン」の使用域では広く「オル」を使用しその否定形は「オラン」となるが、山梨西部方言では「イル」というb類動詞の型基幹に「ン」を後接させる。「する」の否定形は「シン」となる。否定辞「ン」の使用域では広く「セン」となるが、山梨西部方言では「する」のイ段形「シ」に「ン」を後接させる。

「ナイ」の音変異形の「ネー」による「カカネー」「ミネー」「コネー」「シネー」も併用する。「ナイ」が「ナー」となることも多い。

- ・「いっさらわからん。」(まったくわからない。)(市史)
- ・「ほんなこたー聞いちゃいん。」(そんなことは聞いていない。)(市史)
- ・「ほんなこたーしん。」(そんなことはしない。)
- ・「ほんなこたーしねー。」(そんなことはしない。)
- ・「俺はそんなとこへ行かなー。」(俺はそんな所へ行かない。)(市史)

否定形の過去形は、高年層は「ナンダ」「ンカットー」を用いる。「ナンダ」はa類動詞の基幹ア段形、b類動詞の型基幹、「来る」のI型k基幹オ段形、「する」のI型s基幹イ段形と基幹エ段形に後接し、「カカナンダ」「ミナンダ」「コナンダ」「セナンダ・シナンダ」のようになる。下の世代は「ナンダ」は用いず、「ンカット」や「ンカットー」を用いて「カカンカット・カカンカットー」「ミンカット・ミンカットー」「コンカット・コンカットー」「シンカット・シンカットー」のように言う。

- ・「あやまるだけんど、おしょうさんはだまって聞き入れなんだと。」(謝のだけれども、和尚さんは黙っていて聞き入れなかったのだった。)(山梨・「雷の手がた」)

- ・そんなもんは見んかった / 見んかつとー。(そんなものは見なかった。)

		高年層	中若年層
い る	否定非過去	イン	イン
	否定過去	イナンダ インカットー	インカット インカットー
す る	否定非過去	シン	シン
	否定過去	シナンダ セナンダ シンカットー	シンカット シンカットー

〈丁寧形〉

a類動詞の基幹イ段形、b類動詞の型基幹、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に、接辞「マス」を後接する形を取る。「マス」と同様に「ヤス」を後接させる表現があるが、これは甲府市方言では主に男性が用いる。

- ・「さあ、そろそろ出かけやしよー。」(さあ、そろそろ出かけましょう。)(市史)
- ・「昨夜は一時過ぎに帰りやした。」(昨夜は一時過ぎに帰りました。)(市史)
- 「マス」と同様に「イス」を後接させる表現があるが、これは「マス」や「ヤス」よりも使用が少ない。
- ・「どこへ行ってきーした。」(どこに行きました。)(市史)
- ・「一緒に行きーすけ。」(一緒に行きますか。)(市史)

山梨方言は敬語の使用がそれほど活発ではなく、丁寧形も少ないが、その中でも甲府市方言は丁寧形が多く見られる方である。

〈使役形〉

a類動詞の基幹ア段形に「セル」「ス」が、b類動詞は型基幹に「サセル」「サス」が、「来る」は「コ」に「サセル」「サス」が、「する」は「サ」に「セル」「ス」が付く。「サス」「ス」の付く形はa類動詞に、「サセル」「セル」の付く形はb類動詞に準じた活用をする。高年層ほど「セル」の形式を用いる傾向が見られる。

- ・「妹に部屋の障子を開かせせざー。」(妹に部屋の障子を開かせせよう。)(市史)
- ・「太郎を役場に行かせっか。」(太郎を役場に行

かせようか。[「行かせずか」より](市史)
 ・「もっと早く起こさせればよかったに。」(もっと早く起こさせればよかったのに。)(市史)

〈受身形〉

型ア段形に「レル」が付く。b 類動詞に準じた活用をする。

〈可能形〉

「カケル」「ミレル」「コレル」などのI型の基幹工段形-ルの形(可能動詞)を用いる。この他に、I型の基幹工段形-レルの形、いわゆる「レ足す形」が使用される。「カケレル」「ミレレル」「コレレル」など。「デキル」も「デキレル」とレ足す形になるのは高年層女性に見受けられる。レ足す形の方が可能の度合いが強まると内省する話者が多い。

- ・甲府に行けるよ。(甲府に行けるよ。)
- ・そこ行きゃー探せれるら。(そこに行けば探せるだろう。)
- ・またここで暮らせれるだよ。(またここで暮らせるのだよ。)

「できる」は方言形で「デル」となる。「デル」の否定形は「デン」。

- ・勉強のでるほこはいーじゃんねー。(勉強のできる子はいいですね。)
- ・「勉強がよくでた。」(勉強がよくできた。)(市史)
- ・あそこに道がでて楽になりやしたね。(あそこに道ができて楽になりましたね。)
- ・ほんなこんおれはでんよ。(そんなことはおれはできないよ。)

〈尊敬形〉

型ア段形に「レル」の付く「カカレル」「ミラレル」「コラレル」「サレル」を用いる。「来る」においては敬語動詞の「オイデル」も使用する。

山梨方言は敬語の使用がそれほど活発ではないが、その中でも甲府市方言は敬語使用が多く見られる方である。

〈継続形〉

「ている」が「テール」となった「カイテール」「ミテール」「キテール」「シテール」を用いる。

- ・「どうして、そげえに悲しそうな顔をしてえるずら。」(どうして、そんなに悲しそうな顔をしているのだろう。)(山梨・「甲州善光寺の

棟木」)

過去を表すトーは、文脈によって継続形を表すこともある。

- ・「あれあれ義教さまによく似とー一人ん通らあ。」(あれあれ、義教様によく似ている人が通るよ。)(河内:「義教さん」)
- ・「坊はどこで?」「二階で寝とー。」(「坊はどこだい?」「二階で寝ている。」)

山梨方言は共通語と比較すると継続形が出にくい傾向が見受けられる。共通語ならば継続形を用いるところを継続形なしで表現する。動作動詞よりも状態動詞を用いる場合にその傾向が強まる。

- ・あなたはしっかりした人だから心配しません。(あなたはしっかりしている人だから心配していません。)
- ・太郎ならへー学校からけーったよ。(太郎ならもう学校から帰っているよ。)
- ・東京に行かかとおもー。(東京に行こうかと思っている。)

上記の例も継続形を用いなくてもおかしくはないが、実際の方言談話を聞くと共通語との違いを感じる部分である。

〈希望形〉

「タイ」が母音融合して「テー」となる。「テー」はa類動詞と「来る」「する」のイ段形、b類動詞では型基幹に後接する。「テー」は形容詞型の活用をする。

- ・「あの人も行きてーずら。」(あの人も行きたいのだろう。)(市史)
- ・「行きてーら。」(行きたいだろう。)(市史)

〈のだ形〉

「のだ」の「の」部分はなく、断定非過去形に「ダ」が後接し「カクダ」「ミルダ」「クルダ」「スルダ・シルダ」となる。「シルダ」は高年層が使用する。丁寧形の「のです」という形になっても「の」部分がないことは変わらず、「カクデス」「ミルデス」「クルデス」「スルデス・シルデス」のようになる。

- ・「どけー行くだー。(どこへ行くのだ。)(市史)
- ・「さて、そのあした、数千人もてえへんな人夫が来て、柳の大木をきりたおしただ。」(さて、その次の日、数千人もの大変な数の人夫が来て、柳の大木を切り倒したのだ。)(山

梨・「甲州善光寺の棟木」)

〈のだ推量形〉

推量形の箇所でも述べたように、「ラ」や「ズラ」を使う中部地方の中でも、山梨方言では、推量形を「ラ」で、のだ推量形を「ズラ」で表現するという、推量形とのだ推量形の使い分けが明瞭であることが特徴に挙げられる。

断定形(連体形)に「ズラ」が後接する。

・「もう出かけるずら。(もう出かけるのだろう。)

(市史)

・「あの人も行きてずら。(あの人も行きたいのだろう。)(市史)

「書く」において、推量形とのだ推量形、それぞれの非過去形と過去形、世代差をまとめると以下ようになる。前述の推量形、過去推量形の項も参照のこと。

「書く」		高年層	中若年層
推量	非過去	カクラ	カクラ
	過去	カイツラ	カイタラ
のだ推量	非過去	カクズラ	カクズラ
	過去	カイツラ	カイツラ

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

「アカイ」と、アイ連母音の融合・工長音化(ai eR)による「アケー」がある。語幹末aの形容詞の一部は同様に母音融合する。

語幹末母音がuの形容詞の一部は、ウイ連母音の融合・イ長音化(ui iR)によって「ワリー(悪い)」などの形でも用いられるが、ウイ連母音をもつ形容詞が全てイ長音化するわけではない(例:カルイ×カリー)

語幹末母音がoの形容詞の一部は、オイ連母音の融合・工長音化(oi eR)によって「オモシレー(おもしろい)」などの形でも用いられるが、これもオイ連母音をもつ形容詞が全て工長音化するわけではない(例:キヨイ×キエー)

断定非過去形と連体非過去形は同形で、以下のように用いられる。

・せんせーんちの犬はでっけー。(先生の家の

犬は大きい。)

・「この甲斐の国(山梨県)甲府市がでっけえででっけえ湖であったころのことだと。」(この甲斐の国の甲府市が大きい大きい湖であったころのことです。)(山梨・「甲斐の湖」)

〈断定過去形・連体過去形〉

形容詞の断定過去形と連体過去形は同形で、語幹に「カッタ」を後接した形と「カッター」を後接した形がある。

・顔がすげー赤かつとー。(顔がすごく赤かった。)

・赤かつとー布の色んあせて桃色になつとー。

(赤かった布の色があせて桃色になった。)

〈推量形〉

動詞と同様に、推量を表す形式として「ラ」が用いられる。「ラ」は、断定形に後接する。

・「きっと寒いら。(きっと寒いだろう。)(市史)

・「手が冷てーら。(手が冷たいだろう。)(市史)

後述の過去推量形、のだ推量形の項も参照のこと。

〈過去推量形〉

動詞と同様に、推量辞として高年層は「ツラ」を用い、下の世代は過去推量形に「タラ」、のだ推量過去形に「タズラ」を用いる。「ツラ」と「タラ」は語幹音便形に後接する。

・「今朝は一番寒かつつら。(今朝は一番寒かっただろう/寒かったのだろう。[高年層])(市史)

・今朝は一番寒かつたら。(今朝は一番寒かっただろう。[中若年層])

前述の推量形、後述ののだ推量形の項も参照のこと。

〈中止形〉

語幹に「クテ」を後接した形になる。「クツテ」と促音化することもある。

・{寒くて/寒くつて}しかたねー。(寒くてしかたない。)

〈仮定形〉

「アカケレバ」「アカカッタラ」の他、「語幹-ケレ-バ」の融合形「アカケリヤ(ー)」を用いる。また「語幹-ケロ-バ」という「アカケロバ」という形もある。動詞でも才段形や才段長音に「バ」が後接する「ミロバ」「シロバ」などの「命令形+バ」に相当する形式があったが、形容詞も語によっては「語幹-ケロ-バ」形が生じるため「ロバ形」と称される

ゆえんである。

- ・黒けりゃ黒いほど甘いだよ。(黒ければ黒いほど甘いだよ。)
- ・それだけ赤けるばへー食えられるかもしれん。(それだけ赤ければもう食べられるかもしれない。)

動詞と同様、「ジャ(ー)」による仮定表現を用いる。

- ・そんねに早いじゃ代表に選ばれるらよ。(そんなに早いなら代表に選ばれるだろうよ。)

〈否定形〉

語幹に「ク」をつけ「ナイ」を後接した形になる。「クナイ」の音変異形の「クネー」も後接する。

- ・まだ暗くねー。(まだ暗くない。)

〈なる形〉

語幹に「ク」をつけ「ナル」を後接した形になる。

- ・「わめくのーやめて、おとなしーくなっちゃったんだと。」(わめくのをやめて、おとなしくなっちゃったんだと。)(山梨・「雷の手がた」)

〈丁寧形〉

「デス」を断定非過去形・断定過去形・否定形に後接させる。「のだ」の丁寧形「のです」は、山梨方言においては「の」がなく「デス」になるため、丁寧形なのか、「のです」の意味を表すかは、文脈から判断することになる。

伝統的方言として「ゴイス」がある。オ段長音の交替語幹に後接するが、現在ではめったに聞かれない。

- ・「おはよーごいす。」(お早いことでございます。おはようございます。)(市史)
- ・「新年おめでとーごいす。」(新年おめでとうでございます。)(市史)
- ・「よろしゅーごいす。」(よろしいです。)

山梨方言は敬語の使用がそれほど活発ではなく、丁寧形も少ないが、その中でも甲府市方言は丁寧形が多く見られる方である。

〈のだ形〉

動詞と同様、「のだ」の「の」の部分はなく、断定形に「ダ」が後接する。

- ・そのしはふんとに白いだ。(その人は本当に色白なのだ。)

〈のだ推量形〉

動詞と同様に、「ラ」や「ズラ」を使う中部地方の中でも、山梨方言では、推量形を「ラ」で、のだ推量形を「ズラ」で表現するという、推量形とのだ推量形の使い分けが明瞭であることが特徴に挙げられる。

断定形(連体形)に「ズラ」が後接する。

- ・「外は寒いずら。」(外は寒いだろう。)(市史)

「赤い」において、推量形とのだ推量形、それぞれの非過去形と過去形、世代差をまとめると以下のようなになる。前述の推量形、過去推量形の項も参照のこと。

「赤い」		高年層	中若年層
推量	非過去	アカイラ	アカイラ
	過去	アカカツラ	アカカツラ
のだ推量	非過去	アカイズラ	アカイズラ
	過去	アカカツラ	アカカツラズラ

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形〉

形容名詞述語、名詞述語とも断定非過去形は「ダ」と「ドー」の語尾をもつ。双方、語幹に後接する。

- ・この部屋は静かどー。(この部屋は静かだ。)
- ・太郎は学生どー。(太郎は学生だ。)

〈連体非過去形〉

形容名詞述語の連体非過去形は「ナ」と「ノ」を用いる。

- ・{静かな / 静かの} 人だねー。(静かな人だねえ。)

名詞述語の連体非過去形には「デアル」と「ノ」を用いるが、「デアル」は共通語的で、「ノ」の方が使用が多い。

〈断定過去形・連体過去形〉

形容名詞述語、名詞述語の断定過去形・連体過去形は同形で、「ダッタ」と「ダットー」の形をとる。

- ・あの部屋は静かだっとー。(あの部屋は静かだった。)
- ・さっきまで静かだっとー部屋。(さっきまで静かだった部屋。)
- ・太郎は学生だっとー。(太郎は学生だった。)
- ・学生だっとーし。(学生だった人。)

〈推量形〉

推量を表す形式として「ズラ」が用いられる。形容名詞・名詞に後接する。動詞と形容詞では推量形に「ラ」を用いるが、体言では「ラ」が後接することはない。「ズラ」が後接して推量を表す。のだ推量でも「ズラ」を用いるため、形式名詞・名詞の推量形とのだ推量形は同形となる。

- ・「この離れは静かずら。」(この離れは静かだろう/静かなだろう。)(市史)
- ・「こんなことをしたのはお前ずら。」(こんなことをしたのはお前だろう/お前なのだろう。)(市史)
- ・「あの大木は有名な一本松ずら。」(あの大木は有名な一本松だろう/一本松なのだろう。)(市史)
- ・「みなで五万円ずら。」(全部で五万円だろう/五万円なのだろう。)(市史)

後述の過去推量形, のだ推量形の項も参照のこと。

〈過去推量形〉

形容詞と同様に、推量辞として高年層は「ツラ」を用い、下の世代は過去推量形に「タラ」のだ推量過去形に「タズラ」を用いる。「ツラ」と「タラ」は語幹音便形に後接する。

- ・「犬は元氣だつら。」(犬は元氣だったろう/元氣だったのだろう。[高年層])(市史)
- ・犬は元氣だつらら。(犬は元氣だったろう。[中若年層])

前述の推量形, 後述ののだ推量形の項も参照のこと。

〈中止形〉

「デ」を後接した形になる。

- ・この部屋は静かで、さびしい。(この部屋は静かでさびしい。)
- ・太郎は学生で、一人暮らしだ。(太郎は学生で一人暮らしだ。)

〈仮定形〉

「ナラ」「ダツタラ」が後接した形の他、「ジャ(ー)」が後接し、多用される。

- ・「そこがそんなに奇麗じゃー行ってみたい。」(そこがそんなにきれいなら行ってみたい。)(市史)
- ・学生じゃー安くしてくれるらよ。(学生なら安くしてくれるだろうよ。)

〈否定形〉

「ジャ(ー)ナイ」「ジャ(ー)ネー」「デワナイ」を後接した形になる。

- ・この部屋は静かじゃねー。(この部屋は静かではない。)
- ・太郎は学生じゃーねー。(太郎は学生ではない。)

〈なる形〉

「ニ」を付け「ナル」が後接する。その音変異形の「ンナル」も用いられる。

- ・あしたは善光寺の棟木になるんだよ、みんなにきられてしまうだ。(明日は善光寺の棟木になるのだよ、皆に切られてしまうのだ。)(山梨・「甲州善光寺の棟木」)
- ・日本一の大将が造ったにふさわしい大伽藍になっただと。(日本一の大将が造ったにふさわしい大伽藍になったのだった。)(山梨・「甲州善光寺の棟木」)
- ・やっこさおしょうさんもその氣んなっただけんど、まだ、まだ、力あゆるめなんだと。(やっこ和尚さんもその気になったけれども、まだまだ力をゆるめなかったのだった。)(山梨・「雷の手がた」)

〈丁寧形〉

「シズカデス」「学生デス」の他、伝統的方言として「デゴイス」があるが、現在ではめったに聞かれない。

- ・その部屋は大変静かでございす。(その部屋は大変静かでございます。)
- ・太郎は学生でございす。(太郎は学生でございます。)

山梨方言は敬語の使用がそれほど活発ではなく、丁寧形も少ないが、その中でも甲府市方言は丁寧形が多く見られる方である。

〈のだ形〉

「ナンダ」を後接した形になる。これはあまり用いられず、「シズカダ/シズカドー」「学生ダ/学生ドー」といった断定形や、断定形に終助詞類をつける表現の方が用いられる。

〈のだ推量形〉

推量を表す形式として「ズラ」が後接する。推量形でも「ズラ」を用いるため、形式名詞・名詞の推量形とのだ推量形は同形となる。動詞と形容詞では

推量形に「ラ」を用い、のだ推量に「ズラ」を用いるのと異なる点である。例文は推量形のところを参照のこと。

「学生(だ)」において、推量形とのだ推量形、それぞれの非過去形と過去形、世代差をまとめると以下ようになる。前述の推量形、過去推量形の項も参照のこと。

「学生(だ)」		高年層	中若年層
推量	非過去	学生ズラ	学生ズラ
	過去	学生ダツツラ	学生ダツタラ
のだ推量	非過去	学生ズラ	学生ズラ
	過去	学生ダツツラ	学生ダツタズラ

用例出典

市史：稲垣正幸・清水茂夫・日向敏彦(1988)「方言」『甲府市史 別編 民俗』(第四章言語生活 第四節) 甲府市役所
 山梨：山梨国語教育研究会編著(1975)『山梨のむかし話』

日本標準(2004年に『読みがたり 山梨のむかし話』として発行)

河内：石川緑泥(1932)「甲州河内地方の昔話」『旅と傳説』第5年12月号(三元社)

参考文献

稲垣正幸・清水茂夫(1983)「山梨県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊行会
 稲垣正幸・清水茂夫・日向敏彦(1988)「方言」『甲府市史 別編 民俗』(第四章言語生活 第四節) 甲府市役所
 善理信昭(1992)「山梨県方言」平山輝男他編『日本方言大辞典1』(第二章各地方言の解説) 明治書院
 中村幸彦校注(1965)「ひとりね」『日本古典文学大系 96 近世随筆集』岩波書店
 吉田雅子(1996)「山梨西部方言における推量表現」『国文学論集 29』上智大学国文学会
 (吉田雅子)